資料３・別紙

学習レポート④

ふるさとと、今住む町を学び、比較し未来に向けた学びを創る「ふるさと創造学」

福島県双葉郡浪江町立浪江小学校ほか

東日本大震災と原発事故の影響を受け、今も多くの学校がふるさとを離れ、県内の各地に仮住を続けている、福島県双葉郡の小中高等学校。そんな学校が、離れたふるさとを学び、今住んでいる町を学びながら、地域の未来について考えるのが、「ふるさと創造学」だ。そのような学びを「ふるさとなみえ科」として最初に始めた、浪江町立浪江小学校（遠藤和雄校長・児童数８名）の実践を中心に紹介していく。

二つのふるさとを比較して思考し人々の願いを学ぶ学習

まず、震災直後浪江小学校の校長として、ふるさとなみえ科を創り出した、富岡町の石井賢一教育長はこう話す。

「震災前、浪江小学校をはじめ、町内の６小学校は生活空間が学区とほぼ等しく、学校にとって地域が学びの大きな支えであるとともに、地域の人にとっても学校が未来に向かう心の支えであったと思います。

それが、震災によって他地域での生活を余儀なくされ、すぐには戻れないことが分かってくると、地域の方が、子どもたちにふるさとを忘れさせたくないと言うようになりました。しかし、生活経験が少ない子どもたちにふるさとを伝えるには、どうしても地域の人の力が必要になります。そのため、ちらばって住む地域の方を訪ね、招き、地域を学ぶという発想で、『ふるさとなみえ科』を開始しました。

言うならば、地域の中に学校があるのではなく、学校の中に地域があるという発想の転換をした学びでした。

やがて、ふるさとを離れた双葉郡の小中学校に同様の取り組みが広がり、取り組み全体を『ふるさと創造学』とする枠組みが整理され、一昨年度からは実践校が一堂に会して発表を行う、サミットを開催するようになったのです（資料参照）」

写真手前右より、遠藤和雄校長、大室さおり教諭、写真奥右より、石井賢一教育長、赤司展子さん。

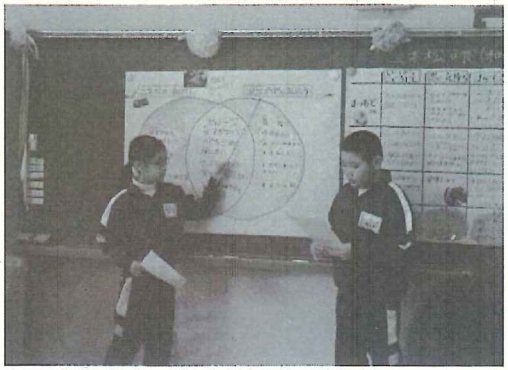
では、「ふるさとなみえ科」とは、どのような学びなのだろうか。単元開発にも関わってきた遠藤校長はこう話す。

「現在、本校で学ぶ子どもたちにとって、今、学校がある二本松市が第二のふるさとになってきています。そこで、ふるさとなみえ科では、浪江町について学ぶだけでなく、二本松市についても学び、互いを比較することなどを通し、それぞれに対する学びを深めながら、将来に対する思いをもてるような学びをしてきています」

大室さおり教諭はこう続ける。

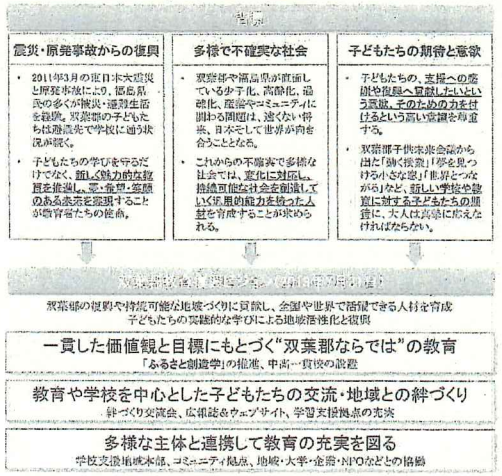
「『ふるさとなみえ科の学習では、『3・4年は食』『5・6年は伝統文化』と大きな枠組みは決めてありますが、その中で、何を学んでいくかは、子どもたちが決め、自ら調べ学びを深めていきます。そのため、思考ツールも多様な場面で活用しています。

例えば、何について学ぶかを決める場面では、家族に聞いたことや地域の方にインタビューしたことをもとに、3・4年生なら浪江町の食について知っていることをウェビングで出し合い、そこから『かぼちゃまんじゅうって何だろう』という興味関心が膨らんだところで、かぼちゃを使ったお菓子を作っていた津島地区の方に話を聞いたり、実際に作って味わったりしました。



ふるさとなみえ科を通して学んだことを発表する子どもたち。

【資料】ふるさと創造学の背景と基本構想



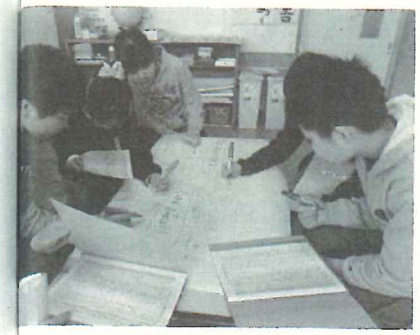
そこから、さらに探究的に学び、二本松の伝統銘菓も調べ学んでいきました」

遠藤校長はこう続ける。

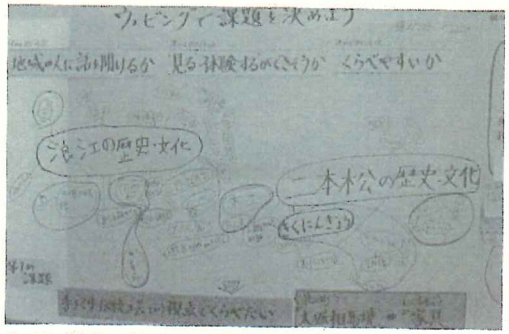
「子どもたちは、二つのふるさとを比較することで学びを深めていくのです。そして、お菓子ならお菓子そのものを学ぶというより、そこに込められた人々の願いを学んでいくわけです。だからこそ、お菓子を食べた時、子どもたちは、自然に『優しい甘さがする』と表現します。

しかも、それが学校の中の学びで終わるのではなく、『ふるさと創造学サミット』があることで、そこで発表したいという憧れももちながら、意欲的に取り組むことができるようになっています」

このような子どもたちの探究を支えるため、国語科で言葉の力を培ったり、社会科等との関連づけを行ったりと、カリキュラム・マネジメントを行ってきたと



調べたことをもとにして、ウェビングを使って整理する子どもたち。



ウェビングを使い、浪江町と二本松市を比較する。

いう。

子どもが変わると、教師が変わり保護者や地域の人も変わる

子どもたちは、こうしたふるさとの学びを通して、地域に何かできないかという思いをもってきたと大室教諭は話す。

「仮設住宅にインタビューに行っても、次第に、『自分たちに期待するところはないか』といった言葉が出てくるようになりました。そのような気持ちが高まり、『地元の大堀相馬焼（焼き物）を学んで、世界に伝えたい』と言う子も出てきています。

あるいは、『んだげんちょ』という方言を使ったオリジナル曲に踊りをつけ、仮設住宅に住む人の運動不足解消に一役買ったり、地元の名所・名物を紹介するカルタづくりを行って、広めようとしたりもしています」

「特殊な環境にあるため、同年代の子ども同士の交流は限られるわけですが、その分、同じ町内で仮設住宅に住んでおられる方々とか、復興に携わる方々とか、多様な大人に関わっていく機会があります。その中で、相手の気持ちを分かろうとする力が育まれているのではないでしょうか。

子どもたちが変わる（育つ）ことで、地域の方々や保護者にも変化をもたらしていると感じます。保護者も避難をして、大きな喪失感をもっているけれども、子どもたちが家に帰って『こんなことを勉強してきたよ』と話すことが、心の安定をもたらしていると感じます」と遠藤校長。

ふるさと創造学の運営に携わってきた、福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会事務局の赤司展子さんも異口同音に話す。

「子どもたちが地域について学び始めたことをきっかけに、震災前に途絶えていた伝統行事を復活しようという動きが出てきたり、伝統食に注目が集まるような動きも出てきたりして、地域にとっても新しい活力になっていると感じます。

先生方も、変わってきました。私が2年前に福島に来て『ふるさと創造学』支援を始めた時には、新たな学びを創り出すことに不安を口にする先生もおられました。しかし、この実践を通して子どもたちが主体的に人と関わり学んでいくのと同時に、先生も主体的に教材開発をされているなと感じています」と赤司さん。

かぼちゃまんじゅうを実際に作って味わう。

大堀相馬焼を体験する子どもたち。

ふるさとを学び、創造する学習は福島だけに必要な学びではない

遠藤校長は、これまでの取り組みを振り返りながら、こう話す。

「既存の発想では、これは子どもたちにはちょっと難しいのではないかと思っていたことも、子ども自身が何とかしたいと思ったり、憧れをもったりして取り組めば、実際にできてしまうのです。やはり、総合的な学習と教科が互いに補完し合う（総合が学ぶ意欲のベースになり、教科が知識・技能等のベースになる）ことで、より多様で深い学びも可能になるのだと思います」

赤司さんは、サミットという場を設けたことも子どもの育ちにつながったと話す。

「サミットではポスターセッションをしましたが、多くの学校が限られたエリアで行うため、声が小さかったり、発表方法や内容が面白そうに見えないと、人が集まってくれません。すると、子どもたちは自ら考えて、声をはって発表したり、宣伝をして人を集めたりと多様な工夫をしていました。このような、学校とは異なる場も学ぶ力につながっていくのだと思います」

最後に、石井教育長は、こうした学びは、特殊な環境にある福島県双葉郡だけに必要なものではないと話した。

「現在のような状況では、単一の学校だけではできないこともありますが『ふるさと創造学』のように双葉郡8町村の取り組みが連携することで、空いていた隙間が埋まり、さらに学びの質も高まっています。そのため、今後はふるさと創造学の発展形として、複数の学校が集まって授業をするようなことも始めようとしていますが、これは過疎化が進む、他の自治体でも考えていくべきことだと思います。

また、ふるさと創造学は、突然、ふるさとから離れることになった子どもたちにとって、アイデンティティを再構築させる取り組みだと思います。そして、その学びを通し、新しい日常、新しいふるさとをつくっていく経験をすることは、将来どのような場で生きていくとしても、必ず子どもたちの大きな力になると思います。それは、急速に人口減少が進む他地方でも同様で、子どもたちが地域に学び地域の未来を考えることが、子どもたちにも、地域の方にも大きな力になると思います」

取材・文／矢ノ浦勝之

総合

事例1

総合的な学習の時間と各教科等をつなぐカリキュラム・デザイン

ふるさとの未来を拓く人づくりのための「ふるさと創造学」の取組

赤司展子
福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会事務局
スーパーコーディネーター

❶ 八町村で取り組む「ふるさと創造学」

「ふるさと創造学」は、福島県双葉郡八町村で取り組んでいる、地域を題材とした探究的な学びである。二〇一一年三月の東日本大震災と原発事故により、双葉郡は経験したことのない甚大な被害を受け、多くの子供たちは今も、ふるさとを離れた避難先で生活を送っている。

多くの課題を抱えながらも復興を実現するには、教育を立て直し新しい未来を創る取組を進める必要があるとして、双葉郡八町村の教育長が協議会を立ち上げ、教育復興の方針をまとめた。

こうして二〇一三年七月に示された「双葉郡教育復興ビジョン」の柱の一つである、双葉郡独自の魅力的な教育が「ふるさと創造学」として具現化され、二〇一四年度より郡内各校で実践されている。それは、変化する社会の中で自ら未来を切り拓いていけるように、子供たちの被災・避難経験を「生きる力」に変えることを目指し、同時にふるさとへの誇りや地域のつながりを育む取組となっている。

現在、郡内一三校の小学校（休業中の四校を除く）では、総合的な学習の時間を中心に取り組んでいる。双葉郡の学校と一口で言っても、学校の特色や子供たちの実態、避難や帰還を含む地域の実情も様々である。そこで、枠組は共通としながら、取組テーマや時間数等は各校が独自に設定している。

伸ばしたい具体的な資質・能力を反映した単元目標の設定、目標を意識した学習活動の展開、各校や地域ならではの学習内容の取扱い等に、一三校それぞれの独自性が見られる。それらはまた、各教科で既習の内容も踏まえ、活用するものとなっている。なお「ふるさと創造学」の取組は、各校が学校教育目標に基づきカリキュラム全体で目指す汎用的な資質・能力の育成と密接につながっており、教科横断的な総合的な学習の時間で取り組むのに適していると考えられる。

「ふるさと創造学」の共通の枠組
【ねらい】主体性・協働性・創造性を伸ばし、ふるさとへの誇りと、自ら未来を切り拓く力を育む
【学習内容】日常生活や地域社会に目を向け、ふるさとのひと・もの・ことを題材とする
【学習活動】子供たちが自力で、そして他者と協力し、そのとき一番の方法を考え出して課題を解決しようとする探究のプロセスを基本とする

❷ 教育委員会（協議会）の取組

各校の独自性を尊重する一方、双葉郡内の小・中・高等学校で一貫して共に進めるには、共有し協同する場も必要である。そこで、八町村の教育長を主体とする双葉郡教育復興ビジョン推進協議会では、双葉郡として多様性をもちつつ一体感をつくり出すような機会を設定している。

(1) ふるさと創造学サミット

年に一度、郡内の学校が集まり成果を共有する「ふるさと創造学サミット」は、身に付けた力を応用する実社会を、子供たちが体験する場でもある。教員参加の実行委員会により企画された子供たちの実態を考慮したプログラムであるが、学校だけではできない実践的で協同的に学び合う機会となっている。参加した小・中・高校生たちは、地域一般に開かれた会場でポスターセッションを行い、調べたことや感じたこと、考えたことを発表し合う（写真）。プレゼンテーションはスピーチに限らず、演じたり踊ったり、あるいは動画にまとめたりと、見る側を惹き付けるための様々な工夫を凝らしてあり、サミットに向けて入念な準備と練習を重ねている。とはいえ、当日になるまでわからない現場の状況や相手の反応を前に、子供たちはもっている知識やスキルを活用し、また資質・能力を発揮して臨機応変にやり遂げる。こうした体験を通して、子供たちはさらに成長していく。そして子供たちの成長の姿に、それを支える地域の大人たちが勇気付けられる。

写真　ポスターセッションの様子

(2) 教員研修会

「ふるさと創造学」の取組開始以来、町村や校種の枠を設けない教員研修会を行っている。学習理論や実践事例に関する講演会、各校の課題をもち寄り対話するワークショップ等を通して、学習内容や学習活動が客観的に見直され改善を施されるという動きが出ている。

この実践と省察の積み重ねが、子供たちの成長を支え未来を創っていくために重要である。これからの社会で向き合う課題にただ一つの正解はなく、そのときどきの最適解を生み出すことが求められているのと同様に、「ふるさと創造学」の取組自体、変化し更新され続け、質の高いものになっていくことが望まれる。そのプロセスではまた、教員自身の思考力、実践力が発揮されると同時に高められ、各教科等における指導にも生かされていくものと期待される。

（あかし・のぶこ）

［ルポ］

子どもの姿で教育復興を目指す「ふるさと創造学」

福島県富岡町立富岡第一小学校・富岡第二小学校

仕事を通してまちの未来を考える

「動物の出産はどうやるんですか」「震災のあとで仕事は変わりましたか」「未来の富岡町はどうなってほしいですか」

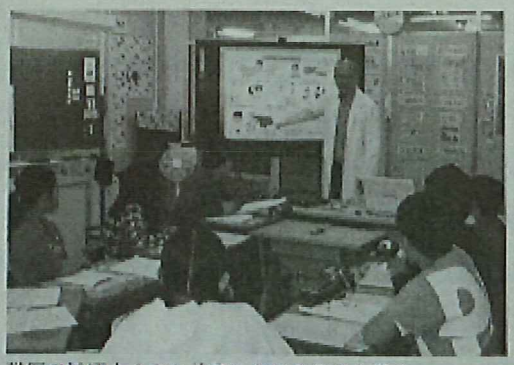
子どもたちから次々と質問を受けるのは、いまは三春町で獣医を営んでいる渡辺正道さん。仕事のかたわら、原発事故で取り残された動物の保護活動などに取り組んでいる富岡町の“住民”だ。

「ブルドックなどの鼻がつぶれている短頭種は自分では出産が難しいんだよ。だから帝王切開をするんだ」

富岡町立富岡第一小学校（岩崎秀一校長）・富岡第二小学校（渡邊かほる校長）の６年生の総合的学習の授業。両校は“一つの学校”として、三春町の仮設校舎で授業を行っている。

６年生の総合的学習のテーマは、「仕事の大切さを知り、体験しよう」。４年生で富岡町に住んでいた人たちから町の歴史や文化・生活などを聞き取り、５年生の時には町の人々から聞き取った思い出などをラジオ番組にして発信するという学習活動を行ってきた。６年生になった今年は、キャリア教育の視点から仕事をテーマに富岡町の未来を考えていく学習に取り組んでいる。今日は、渡辺さんに獣医の様々な仕事を聞いて交流する授業だ。

渡辺さんは話を続ける。震災に



獣医の渡辺さんから仕事にかける思いを聞く

真剣に聞き入る子どもたち

よる原発事故直後に緊急避難し、病院に残してきた犬たちに再会したのは、震災から9日後。20匹のうち5匹が亡くなっていたという。

「でも、一時帰宅したら、出産間際で生きていないだろうと思ったフレンチブルドックが、なんと自分で子どもを産んで、手袋に包んで暖めていた。おじさんはそれを見て大声で泣いたんだ」

子どもたちの顔に真剣さが増す。

「おじさんは、富岡にみんなが戻るのは難しいかもしれないけれど、また動物が飼える町になればと思う。おじさんも富岡に育ててもらったから、仕事で恩返しがしたいと思っています」

ふるさと富岡町にかける熱い思いを聞いて、子どもたちは深く感銘を受けた様子だった。

将来はブリーダーが夢という阿部羽留飛君は、「動物に優しいブリーダーになりたいと思った」と感想を語ってくれた。

ふるさとを題材に、自らの生き方やまちの将来を考える学習、それが今、双葉郡の各学校が取り組んでいる「ふるさと創造学」だ。

双葉郡の学校が共に実践する「ふるさと創造学」

「ふるさと創造学」は、「震災や原発事故を通じ子どもたちが得た経験を生きる力に変え、教育と地域活性化の相乗効果を生み出す」ことをねらいに、平成26年度からスタートした。

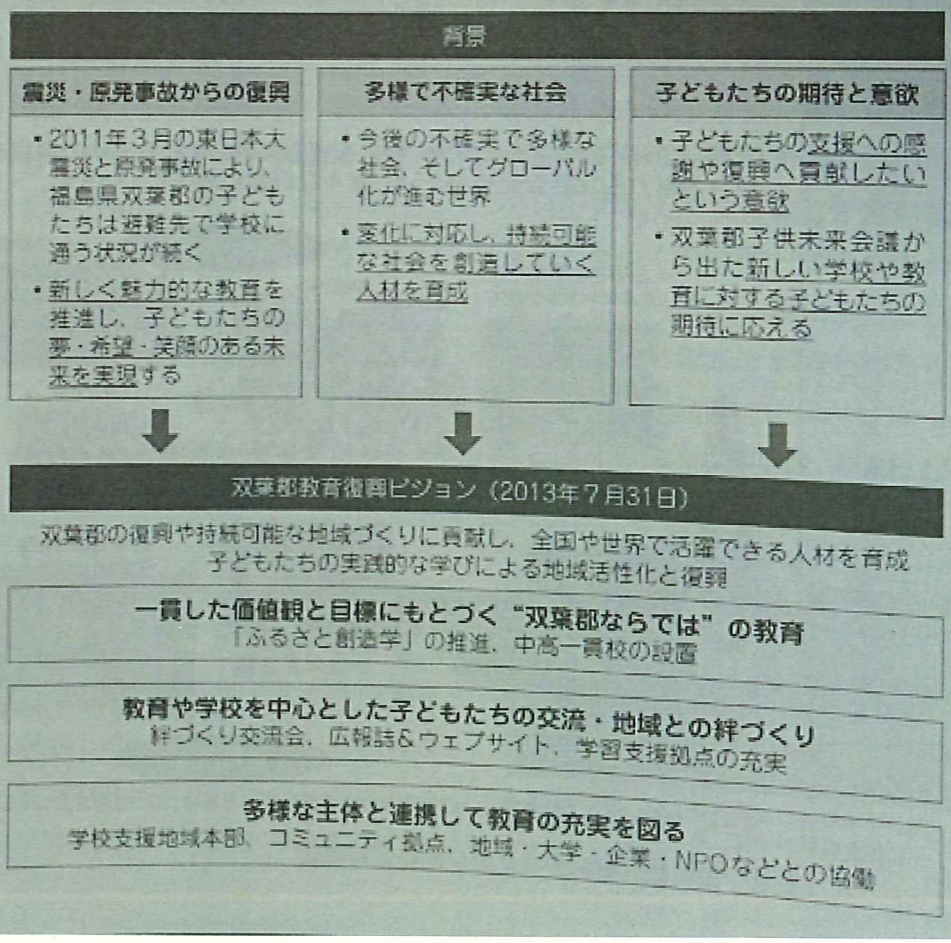
ふるさとのひと・もの・ことを題材に、子どもたちが社会に目を向け課題を設定し、他者と協力しながら課題解決を図る探究的な学習だ。子どもたちの主体性・協働性・創造性を発揮させ、ふるさとへの愛着や誇りを持ちながら、未来を切り拓く力を身に付けさせようと開発された学習活動である。

昨年度の活動をみてみると、浪江町立浪江小学校・津島小学校では、「ふるさとなみえ科」として、津島の「かぼちゃまんじゅう」について調べ、新聞にまとめて発表し、新たなブランド商品を提案した。大熊町立熊町小学校・大野小学校では、「放射線教育を通したふるさと創造学」をテーマに、大熊町の避難・復興状況を調べ、町の課題を見付けて復興や地域創生の提案を行った。双葉町立双葉中学校では、Facebookページを作成し、まちの復興に関わる人々の様子を発信するという試みを行っている。

こうした活動を支えているのがコーディネーターの存在だ。

富岡町学習支援コーディネーターの荒木信彦さんは、高校教師、

図1「ふるさと創造学」の背景と位置付け



大学職員、教育委員会職員としての仕事のかたわら、週1回、富岡町の小中学校を訪れている。富岡町の人材を発掘し、カリキュラムのコーディネートも行う。今年の富岡町のテーマは「つなぐ」だと言う。

「『ふるさと創造学』では、『らしさ』が必要。先人が培ってきた文化や暮らしに触れることに意味があります」とのこと。

今年度は、ふるさとを感じられる場を作ろうと、富岡のよさこい踊りの発表なども学習活動に組み込んだ。

「『なつかしい』と言って涙する富岡の人たちもいました。もっと地域の人を呼ぶために何が仕掛けられるかを考えています」

このように、自分たちのふるさとのよさを取り上げながら、会津若松市、いわき市、三春町など各所に点在する双葉郡8町村の各学校が共同で実践しているのが「ふるさと創造学」だ。

子どもたちの思いから実現したふるさとの教育復興

「震災後、このままでは子どもがいなくなる、といった危機感があったのです」と富岡町の石井賢一教育長は振り返る。

平成22年度に6432名だった双葉郡の小中学生は平成27年度までに588名に激減。富岡町でも、同様に1487名から39名となった。現在では、小学生15名、中学生24名の小規模校として学校が営まれている。

平成24年から、全国の双葉郡の子どもたちを集めた「子供未来会議」が開催。大人も交え、子どもたちは双葉郡のこれからの姿や理想の学校について、回を重ねて語り合った。それを受け、原発事故避難をした8町村の当時の教育長がこれからの教育について話し合い、平成25年に「双葉郡教育復興ビジョン」を策定、双葉郡ならではの教育を行おうと、「ふるさと創造学」を立ち上げることになった。

さらに、「ふるさと創造学」の実践を交流し合う「ふるさと創造学サミット」、全国から双葉郡の子どもたちを集めて交流する「小学校

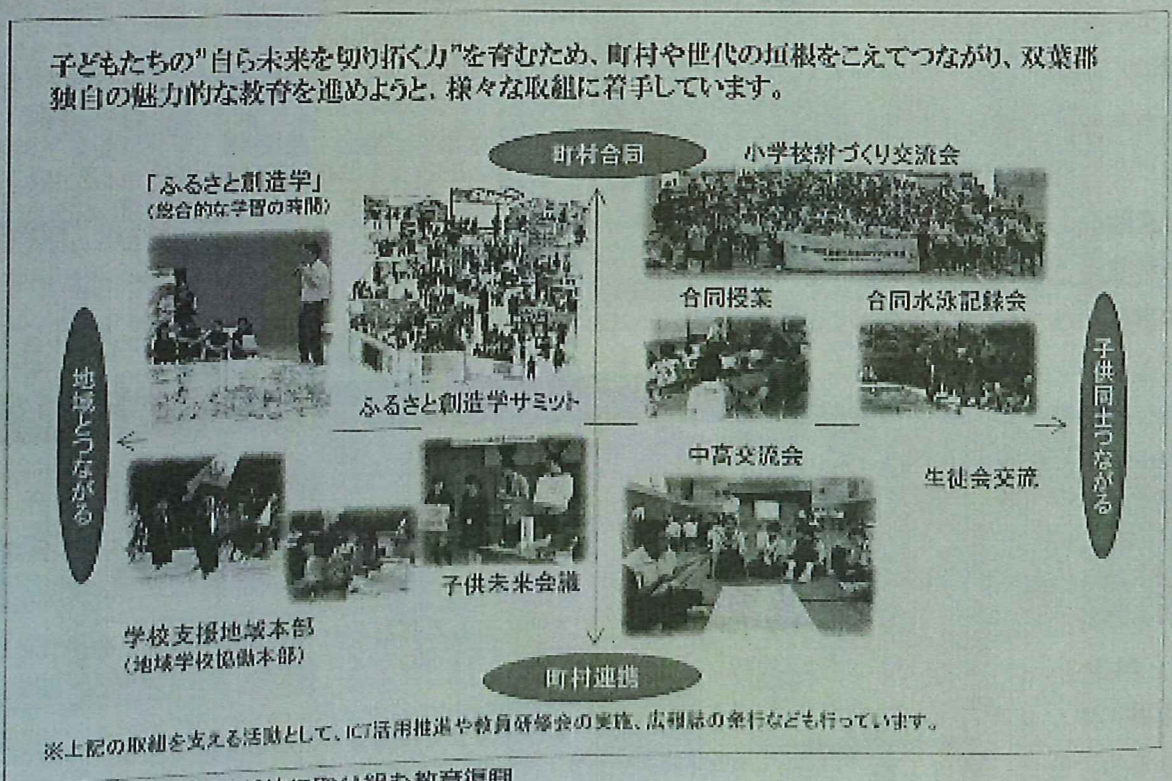


図2　双葉郡8町村が共に取り組む教育復興

ふるさと創造学サミットの様子

学習成果を発表

絆づくり交流会」のほか、合同水泳記録会、生徒会交流会など、教育復興を目指す様々な実践が生まれていった。

「ふるさと創造学」も、今年度で3年目を迎え、各学校での実践も多彩な学習活動となっている。

学校と地域をオープンに「つなぐ」

「避難当初、子どもたちの様子が心配でしたが、思ったよりは大丈夫でした。親しんだ先生のところで学びたいと言って、他校に転校後、戻ってくる子どももいました」と話すのは富岡第二小学校教務主任の鈴木博教諭。富岡町の学校は、工場跡地を改造した校舎で、幼・小・中が同居してのスタートとなったが、この状況を「恵まれた環境」と石井教育長は言う。幼・小・中一体校舎によって、子どもたちのタテのつながりもでき、教師たちも子どもの成長を一体的にみることができるとのこと。今年10月には、合同で切り絵の制作なども行われた。

「危機を乗り越える子どもの力を信じたい。恵まれた環境だからこそできる教育があると思っています。(ふるさとという)地域がないからこそ、子どもたちにとって本当に必要な人材が浮かび上がってくる。そうした地域とのつながりを得ながら、子どもたちの姿を発信していきたい」と石井教育長は語った。

荒木信彦さんも、「『勉強』と『学ぶこと』の違いは、他との関わり。富岡や地元の人たちと子どもの思いをつなげて、未来を創造できる実践にしたい」と言葉をつなげた。

双葉郡の住民帰還は来年から徐々に始まる。富岡町への帰還を想定して、現在、新たな教育のコンセプトが検討されているという。「オープン」「クリエイティブ」「イノベイティブ」がキーワードとのことだ。

「特に『オープン』が基本。『ふるさと創造学』を起点に地域を引き入れ、未来を担う子どもを育てたい。社会に開かれた教育課程は、単なる学力向上のためのものでなく、人を育てるカリキュラムだと思っています」(石井教育長)

渡辺さんの話を聞いた6年生の子どもたちは、この後、地域での職業体験などを通して働くことの大切さを知り、町の未来についての自分の考えをまとめる学習に取り組んでいく予定だ。「ふるさと創造学」は、子どもの姿によって復興を目指す、学校と地域をつなぐ試みともいえよう。

(取材/編集部　萩原和夫)

左から富岡第二小学校教務主任の鈴木博教諭、石井賢一富岡町教育長、富岡町学習支援コーディネーターの荒木信彦さん